

クリスチャン・ヴォルフの

哲學用語について

—ヴォルフ研究、其の一—

細川 董

—

クリスチャン・ヴォルフ Christian Wolff (1679-1754) の哲學用語について語る時、先づ注目すべきは、母國語の使用といふ事であるが、然し、この表面的な事柄にのみ著目するなら、むしろベームにその嚆矢を、ライプニッツにその唱道を、チルンハウスやトマジウスに、その實験の勇氣を見出し得るのは周知である。然らば、ヴォルフを此等の人々から區別するのは、如何なる點に於てあるか。此點について私は、彼が哲學用語の、否哲學の明晰、判明化といふ眞に學的な要求に基いて、母國語を使用した事を本論で實證する。であるから、ヴォルフの母國語の使用を、彼の哲學内容から切離して考へ、トマジウスの「ギリシヤ哲學も、ローマ哲學も、夫々母國語で書かれたではないか、我々ドイツ人が母國語で書いて嘲笑されねばならぬ理由が何處にあるか」といふ民族意識の發展上に於てのみ理解

してゐるツトケ註の如きに、眞の解答を求むべくもない事は言ふまでもない。

これに私は、とりわけ彼のラテン語の名著「第一哲學乃至存在論」*Philosophia prima, sive Ontologia* (1729) の初めの部分をなすプロレゴメナと、ドイツ語で書かれた彼の形而上學 *Metaphysik* (*Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen auch allen Dingen überhaupt*) (1719) の卷末に附されてある *Register* に著目する。前者に於ては、哲學用語に對する彼の見解が、いみじくも端的に述べられてゐるが故であり、後者は、この見解に従つて書かれた手本の書としてそこで使用されるドイツ語の新造學術語が如何なるラテン語に當るかの例を含むが故である。事實彼のプロレゴメナの大半が如何なる哲學用語を使用すべきかの問題に答へんとしてゐる事は、ヴォルフ哲學に附された重要な根源的アタセントであり、同時に私が、ヴォルフ研究者として、好

むと好まざるとに拘らず、先づ第一に、彼の用語について論ぜざるを得なかつた所以でもある。

二

序文及びプロレゴメナで彼が用語について語る大意を豫め言ふならば、次の様になる。スコラの存在論を改良して、確實なものとし、それによつて、人類に有用なものとなす事が彼の目標とされる。この爲には超人間的な *super natural* のものを排除して、概念を內的理性で理解可能なもの、乃ち明晰 *clara*、判明な *distincta* ものたらしめねばならぬ。こゝに先づ、普通の人の使ふ存在論の用語の、存在論學者による、意味の決定化と共にスコラの存在論の用語の、哲學者による定義の正確化（判明化）によるスコラ用語の保存が要求せられる。この様な仕方ではスコラ用語を保存する事は、スコラ哲學の保存を意味するのでなくて、スコラ哲學の改革を意味するとなされる。ところで、未だ定義による明晰、判明化以前の、普通の人の使ふ用語やスコラの存在論の用語は、素材存在論 *Ontologia naturalis* を形成する段階であつて、存在論は、その用語の明晰、判明化によつて、素材存在論の域を脱し、學的存在論 *Ontologia artificialis* の域に達する事が出来、これによつて、はじめて存在論は、新しい人生と、他の科學の改革とに有用なものたり得るのだとなし、この段階では、存在一般に妥當な概念が解明されるべきであり、従つて、哲學用語が出来る以前のラテン語では知られなかつた哲學用語が、存在論に導入されるに至る。此事は

クリスチャン・ヴォルフの哲學用語について

一方用語の明晰、判明化の要求の徹底として、充分定義されたドイツ語の哲學用語が新しく造られる事の必要をもち、同時に意味が決定されたドイツ慣用語をくみあはせて、もはや、日常の使用法が對應しない存在論の用語の作製による、ラテン語の學術語の翻譯をも意味する。かゝるドイツ語の新造語の課題は、存在論の放棄でなく、存在論の改革といふ高邁な見地より、新しき存在論學者（ヴォルフ自身をさす）により是非なされねばならぬ所のものとなる。これが單純な民族意識といふ様なものによつてでない事は、スコラの用語の保存を認めてゐる一事を以ても豫め了解されるであらう。次に私は、この間の事情を詳細に、プロレゴメナについて確認して行かう。

三

彼は存在論の序文の冒頭に、已に用語を主題に次の如く述べてゐる。即ち、「第一哲學はスコラ學者により、おぼげさな讃辭で秩序づけられた。然しデカルトの哲學が人々の間に認められる様になつてからは、あゝ又スコラの第一哲學かと、侮蔑に導かれ、あらゆる人々の笑ひ草になつた。それといふのは、デカルトが明晰に且つ判明に哲學する事を次の様な方法で始めたからである。即ち明晰な概念が丁度いゝ具合に用語に照應してゐるのでなければ、或は、用語が、それなりの仕方では、すでに決つた概念へと分解可能な定義によつて、一定不變であるのでなければ、用語が承認されず、且つ事物は內的理性によつて理解される仕方では説明されるといふ具合に。スコラの第一哲學で

は、實に用語の定義は、大抵は、用語それ自身よりも、不明瞭であつたし、彼等が述べてゐる基準も、やはり不明瞭で、同様に疑はしかつた。定義についても、規準についても、その何らの効用もほどないくらいに。スコラのそれ等の用語の或部分には、彼等がさう呼んでゐる超人間的な可能性自身の濫用が哲學につけ加はつてゐた。即ち、こゝから、存在論は人生の實際から宙に浮いた杜撰な哲學辭書であるかの如き、かの意見が、まぢがつた事に生ずる。その辭書では、その大部分を、全く我々が無しですませ得る様な哲學用語が説明されてゐるのである。更にデカルトは第一哲學の輕視を完全に推進したのである。といふのは、デカルトの臆見では、存在論の用語は、定義されるよりも、直觀的に、より正しく了解せられる所のさうしたものである。の中に屬するといふ理由で、デカルトは、それなくしては我々がすませない存在論の用語を定義する事をあきらめて、それらは、何らの定義の必要がないと、公言してしまつてゐるから。」

こゝに語られる處は、存在論そのものが悪いのではなく、スコラの存在論を改良せねばならぬ、それには用語の明晰、判明化が一番だといふ根本思想の下に、明晰、判明化の先驅者としてデカルトを顧み、然しデカルトは、存在論史の發展に逆行してゐる、何故なら、彼は存在論の概念的定義を拒否してゐるからと述べ、その理由として、デカルトが直觀的な明白さに重きを置いてゐるからだとして、ヴォルフは考へてゐる様である。この考へで推測つて見ると、ヴォルフは、デカルトの判明 *distincta* は眞の意味の判明でない、と考へてゐた事になる。即ち、デカル

トでは、明晰、判明といふ事が直觀的なものとして理解されてゐる。これに反して、ヴォルフの判明といふ事は、どうも私には、結論的には、矛盾なき機能的構成（機能的構成）を明かにする所の分析を意味すると考へられるのである。といふのも、定義をデカルトが放棄した事は、即ち、ヴォルフの意味での判明さにならぬ、デカルトが徹底してゐない事をいつてゐる様である。ヴォルフによれば、用語の定義とは、明晰、判明にして、完了するのであるから、定義を放棄してゐるといふ事は、ヴォルフから見れば、明晰、判明の企圖が充分満たされてゐない事になる。かくして、Josef Peiper の如くデカルトの *distincta* とヴォルフの *distincta* とを同じ重さで考へる事は早計（早計）といはなければならぬと思ふ。右の如くヴォルフは、デカルトが *clara* に重點をおいてゐると考へてゐたと、推察する事に、さして私は困難を感じないのである。デカルト自身の *clara* と *distincta* の次の定義を見て見ても、兎に角、デカルトに於て *distincta* は *clara* の延長、即ち、*clara* をおし進める事によつて出来る同質物と考へられる様だ。デカルトの定義によれば *clara* とは「注意する精神に現前し、且つ明らかな認識」であり、*distincta* とは「明晰であつて、そして同時に、その他の一切から分離され峻別されてゐて、最早、明晰なるもの以外の何ものをも自らの内に包含してゐない認識」であつた。(Principia Philosophiae, I § 45-46) こゝに、ヴォルフの判明が、*clara* とは一線を畫するものである事は、ヴォルフの直接の師、ライプニッツが、デカルトの *distincta* に自己の *clara* を匹敵せしめ、*distincta* を

概念自身の内容分析として新にもうけてゐると Lande によつて *Vocabulaire de la philosophie* I. p. 109 の *claire* の所で指摘されてゐる事により好ましい、宗悞が與へられてゐると思ふ。即ち、ヴォルフの判明は、このライブニッツの立場を更に前進せしめて、單なる *clara* と袂を別つ事により、新しい一つの世界、即ち、學的存在論の世界を構成する因となつてゐる。こゝにヴォルフが、プロレゴメナの中、§22 までの節で、素朴存在論について語る所では、*clara* といふ言葉だけ出し、*distincta* は用ひず、——*distincta* の反對の *confusa* は出てくるが——§23 以後、自己の存在論、即ち、學的存在論について語るに及んで、はじめ、*distincta* といふ語を、持出してゐるといふ事は、極めて、暗示的であり、従つて、注目すべき點と私は考へる。實際に、彼の用語 *termini* の明晰、判明化の計畫が、如何に配慮せられたかは、興味ある問題であり、これを私は、彼の語る所に従つてこれから究明しよう。この事が、外でもなく必然的に、彼と用語(ドイツ語使用)の謎をとく事になるのであるから。

四

今述べた如く、彼はプロレゴメナに於て、自己の存在論を、實は明白に二つに分つ事によつて語つてゐるのである。即ち §22 までは素朴存在論について、§23 以後は、學的存在論について。さて先づ素朴存在論であるが、こゝでは、その人には明白であるが混亂せる普通の人の使ふ存在論の概念と、これよ

クリスチャン・ヴォルフの哲學用語について

りもより明白であるが、やはり混亂せるスコラ哲學者の使ふ存在論の概念の二つが取扱はれる。

先づ最初に、前者について、如何なる事が意味されるべきかについて、次の如く彼は答へてゐる。即ち「若し何らかの存在論の用語が普通の表現で用ひられるならば、一般の人々によつて受け取られてゐる意味が、はつきり *determinatus* 定義せられ、同じ意味に固定せられて、その使はれてゐる用語に歸せられるべきである。何故かといへば、全哲學に於て、従つて、それ以上に、存在論(存在論は哲學の一部なのであるが)に於ては、用語の受け取られてゐる意味から、離れるべきでない。況んや、この理由によつて、それが普通の表現で用ひられてゐる存在論の用語も、一般にそれらに歸せられるならはしになつてゐる意味より他の意味が、與へられるべきでない。それ故、ただ、哲學では、漠然として、定義のさだかでない意味が、決定へと導かるべきであり、又、語の同じ意味が定常的に固持されるべきである。或は又、若し最も屢々、不漸不變の存在論の用語の意味が、用語の不定の故に、普通の用語では、變化しないでは、常には守られてゐないならば、存在論では、めい／＼の存在論學者によつて、たゞ不變の決定的な意味が要求されるべきであり、而も、それが不動に保護されるべきだ。」(§10)と。こゝでは、存在論の用語について、先づそれに歸せられてゐるならはしになつてゐる意味が與へられ、且つ、普通の表現で用ひられる事が肯定されるのだが、その場合、存在論學者によつて、*indeterminatus* なものや、*determinatus* なものたらしめる

事が要求される。

次にこの普通の人の使ふ用語に續いて、普通の一般大衆に氣附かれてゐないスコラ學者の用語が問題にせられる。即ち、スコラ學者のどんな用語が保存せらるべきか、そして、彼等の哲學から離れて、スコラ學者の用語に存在の餘地ありや否やが次の如く答へられてゐる。即ち「それが、一般には氣附かれてゐない所の何か或る概念が對應するスコラ學者の用語が、保存されるべきである。何故ならば、若しそれらの用語に、或る概念が對應するのであるならば、實にその概念は假定により、一般の人に氣づかれてゐないし、況んや、その用語は又普通の言葉では出て來ないのだから、當の或る概念を意味する事こそ、その用語の仕事であつて、而も全く、これこそ哲學の仕事だ。この理由により、哲學用語として一度よくむかへられるものは變へるべきものでなく、スコラ哲學によつて、若干の用語が提出されてゐるのであれば、それ等は保存されるべきである。」(§11)「若しスコラ學者の用語が保存せられ、と同時に、一方、しつかりと定義されてゐなかつた用語が、より正確に定義され、ば、スコラ學者の第一哲學は、單にドイツへ導入されたものでなく、改良されたものとなる。スコラ學者の哲學は、彼等が、使用する用語そのものによつてはなくてはなくて、用語のより正確ならぬ定義により、且つ、不正に定義された命題によつて出來てゐる。この理由によつて、スコラ學者の用語を保存しはするが、然し、十分正確に定義されてゐない用語を、より正確に定義する所のその人は、スコラ哲學を、そのまゝ自分の哲學とするもの

ではなくて、否それどころか、その一部を獨得のものに改良してゐるのである。命題よりもスコラ學者の存在論に於ける定義は、はるかに澤山あるから。」(§12)と。

かくの如く、素朴存在論の領域を形成するこれら、普通の人の用ひる用語及びスコラ用語はいづれも、意味の不定を決定へ導く事によつて、保存されるべきなのであり、それ相當の理由が述べられてゐる譯であつて、前者、即ち普通の人の使ふ用語に對應して、我々はこゝに已に日常のドイツ語の慣用語の使用の必要性が示されてゐると考へる事が出來るのであり、又同時に、後者については、スコラ哲學に對する彼の非凡な態度を伺ひ知る事が出來るのである。即ち、スコラ哲學では、用語に據はされた意味の混亂が悪いのであつて、用語そのものは悪いのではないと、實に味ふべき言葉で語つてゐる。こゝに至つては、もはや固陋な民族意識の影は渺散して、世界的視野が示されてゐるといへよう。

而もかゝる見解成立の理由として、我々に一見不明なスコラ用語も、混亂はしてゐるが、スコラ學者自身には明白であつたのだし、此事は普通の人の使ふ用語についても言へる事で、この明白さは素朴存在論の用語の特徴として、未だ充分定義されてゐない明白さとして、次の如く語られる。即ち「普通一般に使はれてゐる存在論の用語は、縱へ悪く定義されてゐても明白である。それらを我々が使用せねばならぬ時、何らの定義を用ひないでいゝ程充分に、それが確立してゐるので、それらの用語に我々は明白な概念(縱へそれらが混亂してゐても)を結

びつける。この明白な概念をば、我々は、現存する事物について話す人々に注意する事によつて、用法そのものから掴むのであるが。縦へ用語が非常に不十分に定義されてゐようとも、用語はこの程度まで明白なのだ。例へばスコラ學者は、*Existencia, Substantia, Persona* を不十分に定義してはゐるが、だからといつて用語が不明瞭ではなく明白だ。即ち、その用語を用する事によつて手に入れらるべき明白な概念——この力によつて我々は、實存、實體、人格を確認するのであるが——が、それらの用語に相應してゐる時に」 (§13) と。又、不十分に定義されたスコラ用語の明白さについては、「スコラ學者等によつて存在論に導き入れられた哲學用語は、すべてではないとしても、少くとも大部分明白である。とにかくスコラ學者自身によつて十分に定義されてゐなくとも。といふのは、私は吟味の結果、全ての用語ではなくとも、相當數の用語には、手近かな事物に關する實例や判断によつて傳へらるべき明白な概念が對應してゐる事、更に、それらの用語を作り出した人々が、かゝる明白な概念を念頭に持つてゐた事をも、認めたのである。それらの用語は、とにかく定義は不充分であつたが、それ自體明白であり、又それを作つた人にも明白であつたのである。」例へば、形式 *forma* は、主體の部分から切り離して考へられるが、様相 *modus* は、明かに、部分から切り離せない、といふ風に漠然と定義されてはゐるが、はつきりした實例によつて、明白な概念が様相 *modus* といふ用語には照應してゐるのである。例へば、ぬくもりといふものが、それを認識するの

クリスチャン・ヴォルフの哲學用語について

に充分な、石の様相であるといつた具合に。こゝからして、定義だけでは不明瞭だつたスコラ學者の用語が、實例によつて了解されるのだ。」と。

然しこれ等の用語は必然的に、相對的な曖昧さを脱する事が出來ず、一つの用語が或者には明晰であり、又或者には明晰でないといふ様な事が、あり得るし、それを作つたスコラ學者には、スコラの存在論の用語が明白であつても、讀者には不明瞭だといふ事があつても、別段不思議でないとなれば、讀者の間でも、或讀者には、他の讀者より以上に曖昧だといふ事が起つても不思議ではない筈だと述べ、 (§15) この理由を二つの場合に分つて彼は考へて行く。即ち用語が、或者に明晰である場合はどういふ時かといへば「たとへ、その人が用語を正しく定義出來なくとも、その人の持ち出した、いくつかの實例から、何か共通の或概念が引出され得るならば、その様な時には、その人に、今の用語が明白だつたと考へていふ譯である。換言すれば、問題の用語を説明するのに、いくつかの例を提出してあるといふ事は、その人は、それ等の例に、何か共通の概念を内在させてゐる事は自明であるから、或用語について、何か共通の概念が、諸例から引出され得る以上は、その概念を、或用語が、指示してゐると考へていふ譯である。」 (§16) 次に、用語が、或人に不明瞭であつたと認められる場合はどういふ時かといふと「或人が用語を正しく定義する事が出來ない上に、その人の持出してゐる諸例が、共通の概念に、どうしても還元されない時には、用語がその人に不明瞭であつたと思はれても仕方

がない。それといふのも、その人が、用語を明白にする爲に實例を持出したのならば、それらに何か共通の概念を内在させてゐる筈であるから、この人は、いづれか一つの存在に、實は内在しないものを、誤つて内在してゐる様に判断したか、又は、充分明白でない概念を用語に照應せしめたかである。いづれの場合にせよ、用語は、その人に不明瞭であつたと考へられる。」

(§11)更に次の様な場合にも、用語は、その人に不明瞭だと考へられてゐる。即ち、「或人が、存在に内在してゐるものどもを認識してゐても、まだ當の用語を認容すべきか否か決定出来ない時、さうである。といふのも、用語がその人に明白であれば、その用語は明白な概念を、その人に結びつけるはずである。こゝまで、存在に内在してゐるものどもを認識してゐる人ならば、當の用語を認容しうるか否かを決しうる筈だ。所がこの人はそこまで知つてはいないのであるから、用語は、その人に明白ではない。」 (§18)

右の如く用語の明、不明の相対的な理由を考察する事によつて、次に、ヴォルフは、明白な用語は、結局心の本性 *natura* によつて得られるものだとなし、而もそこで特に注目すべき點は、この心の本性を、人間の心の自然的暴力 *vis* と考へ、従つて、このやうな暴力によつて得られる存在論の用語に照應する概念は、明白ではあつても、混乱せる(判明でない)概念である事を、斷言してゐる箇處である。彼はこれを、普通の人とスコラ學者の各々が彼等の存在論的概念に到達する過程として、次の如く夫々分けて述べてゐる。即ち前者については「そ

れが、正に、存在に内在すると認められるものは、如何なる存在からにもせよ、何處へも引離す事が出来ないといふ事は、理知の本性であり、更に言ふならば、普遍なものは、我々が認識する所の個々のものの中に内在してゐるのである。事物に内在してゐるものを、一方では手近かな事物の中に、認容し、且つ一方ではそれを他の事物の中に、已に認容した事を我々が、思ひ浮べるならば、日常の言葉で扱はれる存在論の用語に照應する混乱した概念は、心の自然的暴力によつて獲得されるものである。」 (§19) 後者についても、前者と同様に、心の自然的暴力によつて、明白ではあるが混乱せるスコラの存在論の概念に到達する事は明白だと述べられ、その理由として「我々は心理學での明白な經驗に基いて、證明濟みの事として、個々のものの中に普遍が存在する事を習慣上主張するのみならず、先驗的認識によつても、この事が根據づけられる事を洞察する智慧のある事を確認するのだ。」 (§20) と彼は述べてゐる。

こゝに至つて、次に注目せねばならぬのは、普通の人の場合といひ、スコラ哲學者の場合といひ、到達する概念が、いづれも、混乱せる存在論の概念といふ點で、素朴存在論の域を出ぬとなされ、後者は、前者よりも明白さの點でのみ優つてゐるに過ぎぬとなされてゐる點である。この事を前者について彼はかう語つてゐる。「混乱せる普通の人の使ふ存在論の概念は、或種の素朴存在論を構成する。素朴存在論は、抽象的な用語——これで、存在に關する一般判断を我々はなすのであるが——を用ひて、混乱して居り、その用語に照應せる、且つ心の普

通の使用で得られる所の概念の複合によつて、定義され得る。」と。後者については、「その結果、スコラ學者は、素朴存在論を、更に仕上げた。」といふのは、彼等は、自分達の使ふ用語に、依然混濁はしてゐるが、毅然たる素朴存在論に出てくる所の、然し、缺陷のある概念を附加したから。それ故、正に、それらの混濁せる概念を止むなく使用する事は、他の學問の分野でも、その概念がどんな名前で通用するにせよ、同様にみられる現象である。而も、共通な概念の使用が、普通の言語生活で、即ち、日常生活で明白な事物について、判断が下される時に、みとめられる。こんな風にする爲に、不十分ではあるが、スコラ學者は、素朴存在論を、仕上げたのである。」(§22)と。

五

§23 以後、*obscura* に對して、*clara* であるばかりでなく、*confusa* に對して、*distincta* である事を要求せられる用語を使用する學的存在論について語られる。先づ、學的存在論とはいかなるものか、そして素朴存在論との關係はどうかについて、「學的な論理學が自然の判明な説明である様に、學的存在論は、素朴存在論の判明な説明であると言ふ事が出来る。」(§23)「それ故、學的存在論は、命題を定義されたものとして説述する。だから、それは、人生そのものにも、科學にも有益だ。且つ、この故に、それは、用語の更に判明な概念を提供するのだから、スコラ哲學者、及び其他の人によつていはれた事が、ずつと明白に理解せられ、大きな確實さに導かれ、それら

クリスチャン・ザオルフの哲學用語について

の關係が、確實な眞理性を伴つて認識されもするといふ事を、學的存在論は成立させるのだ。」(§24)と述べられ、次にこのやうな學的存在論が、素朴存在論に對して優先權 *parotativa* を要求しうる爲には、「更上の事から明白である事が、證明法で討究されるであらう。」(§24) 必要が説かれ、且つ「絶對的に、或は、或る與へられた條件の下に、全ての存在にあてはまるものが、第一哲學に於ては、證明されねばならぬ。」(§25)と附言されてゐる。この言明は極めて暗示的な重要性を我々の探求に對して持つてゐると考へられる。最後に、結論的に彼は、學的存在論に於て、哲學用語は、どの様なものでなければならぬかについて、こう答へてゐるのを見出す事が出来る。

「それ故存在論では、全くの所、あたふ限り抽象的概念が解明されるから、存在一般に妥當な概念が解明される譯であり、これらの概念には、日常の言語生活で使用されどんな用語も對應しないのだ。だから昔のラテン語では知られなかつた哲學用語が存在論に導入さるべきである。」と。

六

こゝに至つて私は、用語に關し極めて注目すべき次の三つの事柄が、彼により、同時一體をなして指示されてゐると結論出来ると思ふ。即ち、

第一に、§23、§24 から、明晰、判明な概念の照應する用語は、存在一般の根據關係をさし示す最も基礎的な要素であるといふ事。

第二に、§24, §25 からは、用語が判明である爲には、その用語に照應する概念の無矛盾性が證明されるべきだといふ事。

第三には、§10, §11, §26 から、かゝる明晰、判明な用語の模範として、ドイツ慣用語の單獨又は組合せによつて、ドイツ人に明晰、判明な新語を作成し、ラテンの學術語を翻譯する事。

こゝに彼に於けるドイツ新造用語使用の學的必然性の眞意を了解する爲に、更にこの三つの事柄の相關關係を、彼の存在論の本質的立場に於て、豫備的に概観しておく事が許されるであらう。

先づ證明法が彼の存在論で如何に重要な役割を持つてゐるかは、已にプロレゴメナの始めの數節で、次の如く述べられてゐるのを見ても明白であらう。存在論は證明されるべきかどうかに就いて、彼は「學は確實な事を證明する術 *habitus* である。存在論で證明されてゐる事は證明されるべきだ。」(§2)と述べ、次に、何故存在論が證明法としてふさわしいかの理由として「第一、哲學では、證明方法を示すべきだ。若し論理學、實踐哲學、物理學、自然神學、一般宇宙論、及び心理學で、すべてが嚴密に證明されるべきであるならば、存在論の原理 *principi ontologici* が用ひらるべきだ。従つて存在論では、何ものも假定的に認容されるべきでない。かくして存在論では、證明方法、乃至學的方法が示されるべきだ。」(§4)と語り、かくて、「第一哲學では、我々が確認し、或は否定する事を、證明する義務があるが故に、第一哲學(存在論)は學である。」と§5で明言される。而して、哲學は、存在論といふ證明法なくしては、何故論ぜら

れ得ないかの理由を「他のすべての哲學的學説が全く同じ方法(證明法)により論ぜられ得る爲に、第一哲學は證明法で究明されるべきであるによつて、この事は先立つ證明なしに明瞭である。それ故、第一哲學なしには、全宇宙に就ての哲學は證明法により論ずる事は出来ない事が明白だ。」(§6)と附言してゐる。

かくして證明法といふ役割に於て第一哲學(存在論)の中心的事柄として、存在論の原理 *principi ontologici* が登場し、これについて存在論§81以下に解明されてゐるのであるが、こゝで私は問題を用語に限つて見てゆくとすると、證明原理として、§91の存在論の二つとして、可能性の先驗的證明の原理 *Principium demonstrandi possibilitatem a priori* の節で、「眞なる事には、可能な概念が照應し、お互に矛盾しないものが歸屬するのだ。」と彼が語つてゐる所をみる時、用語が判明であるためには、それに照應する概念が矛盾を含まぬ所の可能な概念である事が要求されると私は考へざるを得ないのであり、何らかの仕方で、矛盾なく存し得るその仕方を證明するのが證明法であると考へられる。さきに引用された如く、「存在論に於て説明されてゐる所のものには證明されるべきであり、」(§2)「絶對的に或はある與へられた條件の下にすべての存在にあてはまるものが第一哲學に於て證明されねばならぬ。」(§25)限り、勿論、この證明法を概念のみがまぬかれ得る筈はないであらう。命題原理のみならず、今や用語の判明な定義にも證明法が適用されるべき事を私はこゝに見出し得たと思ふのであつて、このやうな姿に私はヴォルフの立場を復元し得ると思ふのである。

二に、用語の定義が矛盾を含まぬ事が證明せられて、明晰、判明な概念（この概念こそ序文で已に存在論的概念と彼が呼ぶものであるが）となり、かくして始めて、この概念は矛盾なき可能な世界、即ち根據の世界を指示し得ると考へる事は誤りではないであらう。さきの第一の結論に見られる如く、全素朴存在論を根據附ける事は同時に、存在一般の根據關係の解明に外ならないが、此の役割を果すべき學的的存在論は、矛盾を含まぬ事によつて可能な世界を指示する所の明晰、判明な用語の使用によつてのみ形成され、同時に、素朴存在論から自己を明別する。根據の世界に到る爲の、第三の結論に示される證明法は、即ち可能な世界に到る爲の無矛盾性の證明であつたと考へられる。かくて、第一の結論と第二の結論との内的關聯が本來的深きに於て、明白となる。この深みに根據と可能なもの一切とのむすびつきを我々は見出すと共に、あるべき存在論は根據の學であり、同時に又、可能なるもの一切に關する學だといふ *Metaphysik* で表明される彼の本來的立場を想起せざるを得ない。こゝにヴォルフのものとして、明晰、判明な概念 \parallel 無矛盾性 \parallel 可能性 \parallel 根據性といふ圖式を推定出來よう。

第三の結論との關聯について語る爲に、このやうな圖式で示される可能性が論理的可能性に盡きるものでない事に言及しておく必要があらう。ヴォルフの論理的可能性の現實性について、*ゴッヒラー* は適切に次の如く語つてゐる。^{註6} *Nach Wolff ist nicht alles logisch Mögliche real möglich, sondern nur das real Mögliche ist logisch möglich.* 即ち、ヴォルフの

クリスチャン・ヴォルフの哲學用語について

矛盾がないといふ論理的可能性は、現實的可能性の中に含まれる事によつて、かへつてそれを含んだものである事が指摘されてゐる。この關係の内に、存在論の高忠實度化用語の明晰、判明化）が、それだけ自己の哲學を人生にプラグマティッシュなものたらしめ得ると語られる祕密と、他を啓蒙するには、先づ自己を啓蒙せねばならぬと考へられた理由、更に、啓蒙的な意義を持つたドイツ語の使用が、用語の定義の證明法を通じての明晰、判明化の實現として把握すべき根據が存在する。こゝに第一第二の結論はさきに擧げた圖式中、可能性に對するヴォルフの主體的理解の態度を通じて第三の結論と結びつく事を知り得たのである。その上、こゝから、ヴォルフは、矛盾なき論理的可能性に於てこそ、現實的可能性があるといふ可能性の理論を、明晰、判明な母國語の使用に於て身を以て示したとさへ言ひ得よう。

七

こゝでは、右の如く、明晰、判明に定義されたドイツ新造語の必要性を歸結するプロレゴメナを中心とする彼の用語論の論旨が、彼の *Halle* 大學でのドイツ語の講義をまとめて出來た啓蒙の書 *Metaphysik* に於て完全に示されたといふ私の推定を、その *Register* に示されてゐる中の若干の語について検討して置かう。

この *Register* には、註7に見られる如く、ヴォルフによるドイツ語の新造語がそれに呼應するラテン語と對をなして示さ

れてゐる。この中ドイツの日常語の Art と Ding を組合せて Art der Dinge といふ語を作り、これをラテン語の Species にもてゐる等は、日常語の組合せにより作られた新語の一例であらう。又、ヴォルフの先驅者トマジウスが Conceptus を獨譯するのに、語尾をドイツ語に歸化させるだけで Concept としたのに對して、ヴォルフは、單刀直入 Begriff となし、これに Notio といふラテン語を與へてゐる。更にギリシヤ語の Harmonia を從來 Uebereinstimmung と獨譯したのは、Goethe の特筆すべき功績の二つと Engel, Deutsche Sprachschöpfer で數へられてゐる様であるが、ヴォルフが已に、この Harmonia praestabilita に Vorherbestimmte Uebereinstimmung を與へてゐるのを私は見出す。これらの用語に判明な定義が夫々、同書で與へられてゐる事は言をまごもないが、就中、ラテン語の ratio に對するものとして、Grund と Vernunft の二つを作つてゐる等は最も注目し、値しよう。Vernunft は同書で最深の根據 Grund として考へられてゐるものであり、Grund なる用語とその定義を、ヴォルフは同書で、自らの手になる獨自のものとして述べてゐる。彼は、ラテン語の ratio、ライブニッツが使つたフランス語の raison の適譯として Grund をあてる。普通の用法では、Ursache がいつらうに考へられるが、自分は、Ursache はむしろラテン語の Causa だきたるものといふ。この Ursache であり、その普遍的なものとして Grund を考へるのだと述べ (Metaphysik II. §13) 更に Grund と Ursache の關係を大凡かう定義し

てゐる。(Metaphysik I. §29) 即ち、A に關して、A の中に又は外に、B が何故に存在するか¹の理由を含む時、A は B の Ursache 〓 Causa だと定義し、A に歸せられる B の理由を根據 Grund といふ。B は A に於て根據づけられるといふ。この根據の定義からも察せられる事だが、根據は、内的外的兩面の二重性に於て實際に示される事が多い。例へば、窓についての二重の根據 doppelten Grund として、²窓の照明 Erleuchtung der Gemächer と快的な眺望 bequeme Aussicht 〓 ³Strasse Veränderung とを彼は擧げてゐる。此例に於てみられる如く、二重の根據は、同一の事柄の二つの矛盾しない可能的側面として解明されてゐる事に注目せねばならない。Grund の定義は單に Ursache から自己を明白に區別するのみならず、如何に矛盾なく機能的に判明であるかを知ると共に、如何にプラグマティシユな身近なものであるかの一端を知り得たと思ふ。Ratio がトマス神學に於て、周知の如く直觀知 intellectus と明別せられて定義されてゐた事⁴を想起するならば、ヴォルフによりこの明晰な ratio の上に更に加へられた判明な定義を Grund が背負はされてゐる事の中に、フロレノメナで示された用語についての彼の主張の實現を見出し得るといつてゐてゐるであらう。(一)

註

註 1 Heinrich Wuttke, Die wolfsche Philosophie, (1841)

註 2 III Sprache Wolfs 參照。特にその冒頭、「學問的討論に母國語を使用したトマジウスやチルンハウスの模範に従つた少數の大學教授の中の一人であつた事によつ

てゐる。この中ドイツの日常語の Art と Ding を組合せて Art der Dinge といふ語を作り、これをラテン語の Species にもてゐる等は、日常語の組合せにより作られた新語の一例であらう。又、ヴォルフの先驅者トマジウスが Conceptus を獨譯するのに、語尾をドイツ語に歸化させるだけで Concept としたのに對して、ヴォルフは、單刀直入 Begriff となし、これに Notio といふラテン語を與へてゐる。更にギリシヤ語の Harmonia を從來 Uebereinstimmung と獨譯したのは、Goethe の特筆すべき功績の二つと Engel, Deutsche Sprachschöpfer で數へられてゐる様であるが、ヴォルフが已に、この Harmonia praestabilita に Vorherbestimmte Uebereinstimmung を與へてゐるのを私は見出す。これらの用語に判明な定義が夫々、同書で與へられてゐる事は言をまごもないが、就中、ラテン語の ratio に對するものとして、Grund と Vernunft の二つを作つてゐる等は最も注目し、値しよう。Vernunft は同書で最深の根據 Grund として考へられてゐるものであり、Grund なる用語とその定義を、ヴォルフは同書で、自らの手になる獨自のものとして述べてゐる。彼は、ラテン語の ratio、ライブニッツが使つたフランス語の raison の適譯として Grund をあてる。普通の用法では、Ursache がいつらうに考へられるが、自分は、Ursache はむしろラテン語の Causa だきたるものといふ。この Ursache であり、その普遍的なものとして Grund を考へるのだと述べ (Metaphysik II. §13) 更に Grund と Ursache の關係を大凡かう定義し

て、思辨内容によつて以上に、ヴォルフはドイツに功勞を建てた」と語り、結論的にヤロフ・ペーメをドイツ哲學の祖となすヘーゲルの説に反對し、クリスチャン・ヴォルフを以てドイツ哲學は始る」と提言してはゐるが、その理由としてペーメに民族意識なく將來への影響を見出し難いが故と斷じてゐる點はヴットケの觀點を最もよく示してゐる。而もこの民族意識そのものは判明ならしめられてゐない點、ヴォルフ用語の眞に學問的考察を缺いてゐる。

註2 *Ontologia artificialis* は、直譯すれば人爲存在論であるが、意味の上からこゝでは、敢て、學的存在論と譯した。自然存在論 *Ontologia naturalis* は素朴存在論と。前者は嚴密に學的方法を持つ事によつて學的であり、後者はこれを持たぬ事によつて素朴であるといふ意味でこの譯が適切であると考へた故である。ヴォルフに於けるこの兩者の區別は、普遍存在論内での歴史的分と考へられる。

註3 機能的といふ言葉を私が使用したのは、特に判明に重點をおく彼の定義が、他の事物にどうあてはまるかといふ内的關聯性の一般的陳述を示してゐるからであり、且つ此事は、彼の倫理學に於ける *Gut* 即ち、多様性の調和 *Zusammenstimmung des Mannigfaltigen* として完全性の根據の概念 *Grund der Vollkommenheit* (ist *Verhältniss der Abmessungen gegen einander*.) に通ずると思はれるが故である。

クリスチャン・ヴォルフの哲學用語について

註4 Josef Pieper, *Wahrheit der Dinge*, 1951. Erstes Kapitel S. 26. 參照。

註5 Hans Pichler, *Möglichkeit und Widerspruchlosigkeit*, 1912. S. 4. 參照。

註6 チルンハウスが一六八七年、大學の校報にドイツ語の講義を行ふ廣告をしたためライプツィヒから追放を招いた如く、ヴォルフは彼のハルレ大學でのドイツ語による講義の明晰、判明さが非常な好評を博し、多くの聴衆を集めたため、困難、卑劣な教授連の嫉妬にあひ、一七二三年、遂にフリードリッヒ一世にプロシヤよりの追放を命ぜられてゐるのは決して偶然の一致ではないであらう。而も追放後、マールブルクで、彼の講義の假綴から抜萃して「合理的考察」*Vernünftige Gedanken* なる表題の下に印刷した、最初のドイツ語の哲學書の手本、就中、「形而上學」の出版数を重ねてゐる事 (I, 1725, 1729, II, 1724, 1727, 1740) は注目に値する。この間、已にヴォルフは、ロンドン、パリ、ストツクホルムの諸學士院の會員に選ばれ、又ピョートル一世よりペテルブルクに創立を豫定してゐた學士院副總裁の地位につくやう彼に申し送つて來てゐた事、等國外に生じた名聲の故に、フリードリッヒ二世により一七四〇年ハルレに迎へられた事も又我々の注意を喚起する。更に又、追放中の一七二九年ドイツ語の「形而上學」をラテン語で書改めた *Ontologia* では、そのプロレギメナで用語についての見解を語り、暗に、ドイツ語の講義で實現した事を根據づ

け、進放音ノリードリズム一世としての默辭を添へ、自己の哲學の立場を聲明し、あはせて、ノリードリズムを哲學へ勸誘してゐる。大凡以上に見られる如く、高致ノロミヤの社會的進進に抗して、哲學する事の自由を求め、自ら信ずる真理のために、如何に彼が彼の生涯をかへつ、矛盾の克服に努力したかを知り得よう。

冊へ Das erste Register,

Darinnen einige Kunst Wörter Lateinisch
gegeben werden.

A.

Absicht	Finis	Eigenschaft	E.	Attributum.
Allgemeine Harmonie der Dinge	Harmonia universalis	Eigenthümliche Materie		Materia cohaerens.
Anschauende Erkenntniss	Cognitio intuitiva	Einbildungen		Phantasmata
Art der Dinge	Species	Einbildungs-Kraft		Imaginatio
Art der Zusammensetzung	Struktura	Einfluss		Influxus
Art der Entstehung	in instanti oriri	Einschränkung		Limitatio
Ausdehnende Kraft	Vis Elastica	Eintzele Dinge		Individa
Ausnahme	Exceptio	Empfindung		Sensatio
Aussage	Enunciatio	Entgegensetzung		Oppositio
	B.	Erfahrungs-Kunst		Ars observandi
Begebenheit	Eventus	Erfüllung		Complementum
Begreifen	Comprehendere	Fertigkeit		Habitus
Begriff	Notio	Figürliche Erkenntniss		Cognitio symbolica
Besondere Arten	Species subalternae	Fremde Materie		Materia interlabens
		Gedanke	G.	Perceptio, Cogitatio

Bewegungs-Grund

Motivum

Bey-Wörter

Adverbia

Bey-Wörter der Nahmen

Praepositiones.

D.

Diesheit

Haecceitas, Principium individuationis.

Durch ein anderes bestehendes Ding

Accidens

E.

Eigenschaft

Attributum.

Eigenthümliche Materie

Materia cohaerens.

Einbildungen

Phantasmata

Einbildungs-Kraft

Imaginatio

Einfluss

Influxus

Einschränkung

Limitatio

Eintzele Dinge

Individa

Empfindung

Sensatio

Entgegensetzung

Oppositio

Erfahrungs-Kunst

Ars observandi

Erfüllung

Complementum

F.

Fertigkeit

Habitus

Figürliche Erkenntniss

Cognitio symbolica

Fremde Materie

Materia interlabens

G.

Gedanke

Perceptio, Cogitatio

Gegenwirkung	Reaktio	Nahmen	Nomen.
Gegründetes	Gausatum	Naturliches Geschieke	Dispositio naturalis.
Geschlechte der Dinge	Genus	Notwendigkeit in der Freiheit, oder der Sitten	Necessitas moralls.
Gliedmassen der Sinnen	Organa sensoria	Notwendigkeit der Natur	Necessitas physica.
Groesse	Magnitudo		
Grundlichkeit	Soliditas		
Grund	Ratio	Quelle der Veränderung	Q. Principium mutationum.
Grund der Verkehrung	Principium reductiois		R.
Grund des Widerspruches	Principium contradicktionis	Reiner Verstand	R. Intellectus purus.
Gleichgültigkeit	Æquipollentia		S.
	H.	Satz	Propositio.
Haupt-Wort	Verbum	Satz des zureichenden Grundes	Principium rationis sufficientis.
	K.	Satz des nicht zu unterschreitenden	Prinipium indiscernibitum.
Krafft	Vis	Schlechterdinges notwendig	Absolute necessarium, geometricè necessarium, metaphysice necessarium.
	L.	Schein-Gut	Bonum apparens.
Leere Einbildung	Figmentum	Schrancken	Limites.
Leere Sätze	Propositiones identicæ.	Sich auf einander beziehende Dinge	Relata & Correlata.
Lust	Voluptas.	Sinnlicher Abscheu	Aversatio sensitiva.
Leidenschaft	Passio	Sinnliche Begierde	Appetitus sensitivus.
	M.		
Mitlere Wörter	Participia.	Sprung	Saltus.
	N.	Stetigkeit	Continuitas.
Nach einer Sache streben	Appetere.	Stand ordentlicher Gedanken	Status perceptionum ordinatarum.
Nachfolgender Wille	Voluntas consequens.		
Nach und nach entstehen	Successive oriri.		

	T.		
That, oder Thum	Aktio.	Undeutliche Erkenntniß	Cognitio confusa.
Tiefe Einsicht	Acumen.	Unlust	Tedium.
Tiefsinnig	Acumine praedivus.	Vorherbestimmte Ueber- einstimmung oder Har- monie	Harmonia praestabilita.
	U.	Vorhergehender Wille	Voluntas antecedens
Ueberdencken	Reflektere.	Vor sich bestehendes Ding	Substantia
Verabschauen	Aversari.	Vorstellung	Idea
Veränderung	Modificatio.	Vorwort	Pronomen.
Verbindungs-Kunst der Zeichen	Ars combinatoria characteristica.	Ursache	Causa.
Verbindungs-Wort	Copula.	Ursprüngliche Kraft	Vis primitiva.
Verknüpfte Dinge	Connexa.		W.
Verknüpfungs-Wörter	Conjunctiones.	Welt	Universum.
Vermogen	Potentia.	Wesentlicher Name	Substantivum.
Vermogen sich zu besinnen	Reminiscentia.	Willkührlich	Sportaneum.
Verneinungs-Wort	Vocula nega ionis. fignum negationis.	Willkühr	Sportaneitas.
Vernunft	Ratio.	Willkührliches Zeichen	Signum artificiale.
Vernunft ähnliches	Analogum rationis.	Witz	Ingenium.
Vernunft-Kunst des wahrscheinlichen	Logica probabiliim.	Wörter	Vocabula.
Versteckung durch Versetzung	Crypsis per transposi- tionem.	Würcklichkeit	Existentia, Aktus.
Verständlich erklären	Intelligibili modo explicare.	Wurckung	Effektus, Aktio.
Versuche	Experimenta.	Wurckende Ursache	Causa officiens.
Versuch-Kunst	Ars experimentandi.	Zeichen-Kunst	Ars characteristica.
		Zufällige Nahmen	Adjectiva.
		Z.	

Zufällig	Contingens.
Zurucke drucken	Reagere.
Zusammenhang	Nexus.
Zustand	Status.
Zwischen-Wörter	Interjektiones.

註 〇 「直観知 intellectus 又繼續知 ratio 持續知 仕方と察
 びゆる。そのうち、直観知は單純な直観のみの連續
 知なるが、繼續知は「そのみのから他のものへ次
 々に推論してゆく場合に連續するなり。」(Thomas,
 Sum. theol. I, 59, I ad I) 「直観知と繼續知とは互つ
 にならぬ。そのうち、繼續知は「そのみのに繼つる連續
 知のみの持續だが、直観知の方は一時に突然の理解を
 成すべく持たざるなり。」(Thomas, 2 sent. 24. 3, 3 ad 2)
 (譯者 關西大學文學部〔哲學〕部 藤田)

新着外國雜誌所載論文一覽

一 社會學

THE AMERICAN JOURNAL OF SOCIOLOGY, Vol. LXII-
 No. 2.

—[The Interview in Social Research. Editors in Charge
 of This Issue, Riesman, D. and Benney, M.]—

新着外國雜誌所載論文一覽

- Benney, M. and Hughes, E. C.: Of Sociology and the Interview: Editorial Preface.
- Benney, M., Riesman, D. and Star, S. A.: Age and Sex in the Interview.
- Dexter, L. A.: Role Relationship and Conceptions of Neutrality in Interviewing.
- Gorden, R. L.: Dimensions of the Depth Interview.
- Caplow, T.: The Dynamics of Information Interviewing.
- Stanton, H., Back, K. W. and Litwak, E.: Role-playing in Survey Research.
- Cannell, C. F. and Axelrod, M.: The Respondent Reports on the Interview.
- Litwak, E.: A Classification of Biased Questions.
- Lerner, D.: Interviewing Frenchmen.
- The AMERICAN JOURNAL OF SOCIOLOGY, Vol. LXII-
 No. 3.
- Becker, H. S. and Strauss, A. L.: Careers, Personality, and Adult Socialization.
- Coffman, E.: Embarrassment and Social Organization.
- Adler, F.: The Value Concept in Sociology.
- Karfel, H. S.: Democracy Unlimited: Kurt Lewin's Field Theory.
- Tompson, J. D.: Authority and Power in Identical Organizations.
- Hastings, P. K.: The Voter and the Non-voter.
- Stryker, S.: Relationships of Married Offspring and Parent: A Test of Mead's Theory.
- Martin, W. T.: Continuing Urbanization on the Pacific Coast.

For example, this insight into theological-anthropological understanding of Christianity has been inherited by R. Bultmann through the Ritschlian W. Herrmann.

On Christian Wolff's Philosophical Terms.

—A Study of Wolff, No. 1—

By Tadasu Hosokawa

It is said that Wolff first completed and used in his lectures German philosophical technical terms. No philosopher to this day, however, has yet made the true meaning of Wolff's use of his own language clear. For example, Wuttke explained it only in reference to his national consciousness, apart from the philosophical contents of those terms. So I have tried to show the logical necessity of their use from the fundamental stand-point of his philosophy.

For this purpose, on the one hand, I examined the *Prolegomena*, since it especially contains his important opinions on philosophical terms used in his main work *Ontologia*, where, he, dividing *Ontologia* into *Ontologia naturalis* and *Ontologia artificialis*, asserts that in the sphere of *Ontologia naturalis* philosophical terms should not be given other meanings than the meanings attached to them in common usage (10, *Prolegomena*). Here we can find the reason why philosophical terms should be German for the Germans, but he further asserts that in the sphere of *Ontologia naturalis* clear and distinct philosophical terms, satisfying the demands for adequate elements of new scientific philosophy, should be created in his own mother tongue by the combination of its common terms. Here precisely we can find the logical ground of his use of it.

In his *Metaphysik*, one of his German works, we can find clear examples of how he had put his theory into practice (see especially in the Register).